

一．シュンドルボンの概況

一九九七年に世界自然遺産に唯一登録されている Bangladesh のシュンドルボン (The Sundarbans)⁽¹⁾ は、世界最大級のマングローブ林と湿地帯から構成されている (図1、写真1)。同地域は、インド側にも広がり、総計約一〇〇万 ha の豊かな自然環境が存在する。シュンドルボンを象徴する動物はベンガルタイガーである。二〇



シュンドルボン

図1 シュンドルボンの位置



写真1 マングローブ

一五年の Bangladesh シュンドルボン環境林業省 (現在、環境林業・気候変動省) の森林局の統計データによれば、その数は一〇五頭ほどと減少を続けている。その理由としては、人為的な捕獲による個体数の減少や森林伐採により生息できる環境が悪化していること等が考えられる。また、 Bangladesh シュンドルボンは、一九九二年にラム

サール条約に登録され、二六〇種類以上の鳥類が暮らす聖地となっている。

二．世界自然遺産周辺で暮らす地域住民の営みとその課題

Bangladesh シュンドルボンと対岸を接する農村部には、約三五〇万人の住民が暮らしている。彼らの多くは、稲作等の農業、国民的食用魚であるニシン科のイリッシュ (Tenualosa ilisha) を取る漁業、屋根等に使用するニツパヤシ (Nypa fruticans) (写真2) やマングローブの花を蜜源とする天然蜂蜜採取等、第一次産業で暮らしている。つまり、地域住民は、シュンドルボンの自然の恵

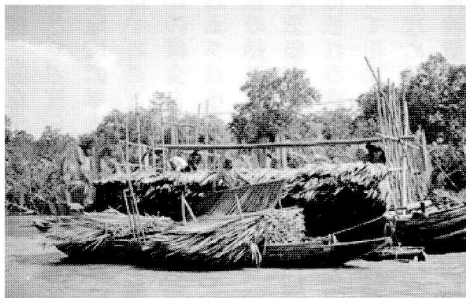


写真2 ニツパヤシ

みを活用した営みを形成している。しかし、地域住民のインタビュアーでは、月収が約三、〇〇〇〜五、〇〇〇タカ (三、八〇〇〜六、四〇〇円ほど)⁽³⁾ である。首都ダッカ等の都市部でカレー一杯を食べると八〇タカ (一〇〇円ほど) を考えたと、地域住民の月収は十分ではなく、経済的貧困が課題である。また、地域住民の自然環境保全に対する意識が低く、村内部や沿岸流域のマングローブを食事の煮炊きに使用するために過剰伐採する等、適切な自然資源の管理・利用が行われていないという問題もある。当該地域では、地域住民の生計向上と自然環境保全という二つの課題を両立させるための取り組みが求められる。今回は、私が二〇一三年一月から現地で実施してきた環境保全や生計向上に関する取り組みの経験から、当該地域住民が主体的に取り組むためのアプローチのポイントやその留意点について解説する。

三．地域住民へのアプローチのポイントとその留意点

(1) 複眼的な取り組み

Bangladesh シュンドルボンでは複雑な問題

が絡み合っているため、一つの課題に特化するのではなく、住民の環境保全、生活支援や生計向上等の複眼的な事業アプローチが有効である。複眼的な視点をもって考えることで、地域を総合的かつ分野横断的にとらえることが可能となる。しかし、あまり課題をつなげ過ぎて考えてしまうと、活動を実施する際には内容が複雑になることや同時に予算・人・物等の確保も考えなければならぬ。そのため、どれから手をつけて良いのか分からなくなることもあるため、中心的な課題を明確にした上で取り組む必要がある。

(2) マルチステイクホルダーの巻き込み
社会的に脆弱な立場にある住民は、孤独で他のさまざまなステイクホルダー（利害関係者）とのネットワークをもっていない。そこで、行政、ビジネスマン、大学や学校の教員、NGO、住民等のマルチステイクホルダーを巻き込んで活動することで、社会的弱者の孤立を解消することが可能である。また、さまざまな関係者が集まることで多様なアイデアが生まれる。さらに、マルチステイクホルダーが関わることでガバナンスが

働くことや、お互いの信頼関係の構築および直接受益者の当事者意識を醸成することにつながる。ただ、トップダウンの傾向が強い途上国の行政官や専門家等の意見が一方的にならないよう、ファシリテーターが中立を保ちながらワークショップを進める必要がある。

(3) 組織化

住民の一体感をもたせるため、協同組合等として組織化し政府へ登録・承認されることで、持続的な活動基盤を形成することが可能である。また、一緒に行動を共にすることで協働意識が芽生え、お互いの相乗効果や主体性を生み出すことにつながる。さらに、組織化して取り組むことで、さまざまなことに挑戦する意欲をかきたてることが可能である。組織化の留意点としては、住民同士のトラブルを防ぐためにも、住民との十分な意見交換や議論を行い、利害関係等を十分に調整した上で進める必要がある。

(4) 継続的な学習機会の創出

社会的弱者の人たちは基本的に教育水準が低く、数回の研修会だけ開催してもその学習効果は限定的である。そのため、地域社会の

中で継続的な学びの機会を提供することで、彼らの理解がより深まり、地域のさまざまな課題解決を期待することができると期待される。継続的な学びの機会をつくることで地域住民のエンパワーメントが高まる。学習の効果が発揮されるまでには時間を要するため、住民と目標や期待される成果をあらかじめ明確にして相互共有した上で進めることが求められよう。

(5) 体験型学習の導入

社会的弱者を対象とした研修会等では、講義だけでその内容を理解できる人は少ない。実際に植林等の体験による活動やカード・ボードゲーム等の直接楽しむことができる学習教材を取り入れることで、住民の理解力を向上させることができる。また、体験型学習により、住民が主体性をもって活動に対するモチベーションを保つことにつながる。留意点としては、どのような体験型学習が効果的であるのかを事前に十分検討し、住民の継続的な興味・関心を得られやすい内容で進める必要がある。

今後は、彼らの主体的な学習によるエンパワーメントをいかに定

着させることができるのか、そして地域性・固有性を尊重しながら生命基盤である自然環境を第一に考えた地域づくりや産業の開発・発展を進めていく必要がある。

注

(1) The Sundarbans は、日本語でシュンドルボンもしくはスタンダルバンズ等と呼ばれている。ここでは、シュンドルボンの読み方で表記する。

(2) インド側は、一九八七年にユネスコの世界自然遺産として登録されている。なお、シュンドルボンを構成する面積の割合は、Bangladesh シュンドルボン側六割、インド側四割となっている。

(3) Bangladesh シュンドルの通貨単位は、タカ (Taka)。一タカ＝一七六円二〇一九年六月二八日時点

換算レート：EXCHANGERATES.ORG
https://aexchange-rates.org/Rate/BDT/JPY(二〇一九年七月一日アクセス)。

(4) 当該地域では、これまでイルカやカメの保全や植林活動、生物多様性保全の教材開発とその普及啓発、天然蜂蜜採取人支援やエコツーリズム等の地域住民主体による取り組みを展開してきた。

佐藤 秀樹 ● さとう ひでき

JICA 青年海外協力隊員（派遣国：エクアドル、職種：野菜栽培）、農業・農村コンサルティング会社や環境NGO等で勤務。主に、開発途上地域の住民を対象とした環境保全や生活・生計向上の取り組みに関する実践的活動および調査研究に従事。現在は、江戸川大学社会学部現代社会学科専任講師／国立公園研究所 研究員。